

【e-ポスター発表】

小規模多機能型居宅介護における認知症の人を支える家族介護者の心理的支援の有効性に関する研究— 専門職による客観的観点から —

○ 任 賢宰 旭川大学 (7849)

キーワード：認知症の人・家族介護者・心理的支援

## 1. 研究目的

認知症の人の介護は、その症状がもつ特徴から家族介護者が心理的に受容し切れず、心理的にバランスが崩れる経験をする。しかし、家族介護者の心理的支援のあり方に関する研究は遅れており、特に介護の過程における心理的支援の検討が急がれている。

認知症の人を支える家族介護者への支援について介護の過程におけるサービス利用と心理的支援の視点から行った実証的研究では、1) 現在施行中の小規模多機能型居宅介護（以下、小多機）サービスの仕組みが有効で、介護を始めてから2年以内の集中的な介入が有効としている。また2) 制度内外の柔軟なサービスの利用と介護の過程の中で家族を支えること、3) 現行の認知症の人への支援策に加え、家族介護者を対象とした新たな支援策の創設により、認知症の人と家族の双方への支援策が法的に保障され、調和し連動・実践できる支援システムの必要性が示唆されている（任 2016：274-275）。しかしながら、小多機を対象とする認知症の人を支える家族介護者の心理的支援に関する有効性は検証されていない。

そこで本研究は、小多機の専門職を対象に質的研究を行い、客観的観点から認知症の人を支える家族介護者の心理的支援の有効性に関する要因の解釈を目的とした。

## 2. 研究の視点および方法

日本の介護を要する認知症の人は250万人といわれており、その多くが家族から介護を受けている。このような状況で実施されたのが介護保険制度で、従来の家族のみに介護を負わせた在宅介護から高齢者の状態に合わせて公的に認定された社会的援助を受けながらの家族介護へと変化してきた。

しかし、現在の介護政策は在宅介護指向ともいえて家族介護者がいることが前提とされており、社会の変化とともに急激な家族形態の変化や介護形態の変化は、介護保険制度を含む社会的支援システムがその変化に追い付くことを困難になっている。また、「認知症疾患の最大の特徴は家族あるいは介護者が第2の疾患の犠牲になることで、家族・介護者の心理的負担に加えて社会的な負担も無視できない。認知症に伴う徘徊や攻撃的行動などの行動障害に対応するためのサービスを含めた社会的なリソースは十分ではない（本間 2013：348-349）」と指摘している。さらに、現在の介護保険制度は要介護者本人に給付する保険でレスパイトの色彩の濃いサービスも基本的には本人を対象としており、家族介護

者に焦点化した支援ではない。自治体ごとに相談窓口が設置されているが、利用者側からその相談窓口にアプローチする体制は不十分で家族介護者への支援も看過されている。

以上の視点を踏まえて、小多機における認知症の人を支える家族介護者の心理的支援の有効性についてその要因を探るために、2018年度に行った先行研究で質的研究への承諾を得た小多機の事業所14か所の専門職を対象に2019年8月から9月までインタビュー調査を行った。調査内容は、専門職の客観的観点から認知症の人と家族介護者のサービス利用と心理的变化、認知症の人と家族介護者の支援や有効性などについて、専門職の実践体験を自由に語ってもらった。

分析にはフリーソフトのKHCoder3.ver.3.Beta.01g(樋口2020)を用いたテキストマイニング手法で行った。テキストマイニングでは、インタビュー調査から得られた音声データについて丁寧に逐語記録を行い、逐語録から得られたテキストデータを分解し、一つひとつを変数と見なし数量データとして同様に扱った。また、インタビュー調査では小多機の専門職の客観的観点から意見や体験などを自由に語ってもらったため、形式や表現などが対象によって異なるものである。そこで、テキストマイニングを行う際「言葉の置き換え」や「品詞の整理」、「強制抽出する語の指定」などに対して以下のような処理を前もって行った。

「言葉の置き換え」は、認知やケアマネなど省略している語は「認知症」や「ケアマネジャー」に置き換え、ホームヘルパーやデイサービス、ショートステイ、小規模多機能型居宅介護、地域包括支援センターなど記述上に省略が必要で省略してもその意味が変わらないように「ヘルパー」や「デイ」、「ショート」、「小多機」、「包括」などに置き換え、文章の内容を把握したうえで同一表記にまとめられる言葉は一つの言葉に置き換えた。

「品詞の整理」は、KH Coderの品詞体系における「名詞」、「サ変名詞」、「形容動詞」、「固有名詞」、「組織名」、「人名」、「地名」、「ナイ形容(問題ない、だらしがないなど)」、「副詞可能」、「動詞」、「形容詞」、「副詞」、「名詞B」、「名詞C」の形態素を解釈に用いた。

「強制抽出する語の指定」は、「認知症」や「介護者」など解釈ソフトを利用することによって「認知」、「症」、「介護」、「者」のように意味が変わる語については、強制的に語を指定することで本来の意味が伝わるようにした。

さらに、本稿は小多機における認知症の人を支える家族介護者の心理的支援の有効性に関する要因をテキストデータから解釈することが目的であるため、語りの良し悪しによる分類は行わないものとし、あくまで客観的に判断できる範囲で解釈を行った。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、倫理委員会の審査を受け承認(東通倫研第201806号)を得た先行研究において質的研究の承諾が得られた小多機の事業所の専門職を対象に行った。調査の実施にあたって、調査協力者に研究のテーマや目的、内容に加えて、情報は保護されること、研究

への協力は自由意志であること、協力について同意した後でも中止できること、調査実施の後でも撤回できること、録音をとることなどの内容を説明し行った。また、インタビュー内容は逐語記録を行い、対象の特定につながると思われる内容は個人情報の保護のために記号や英文字で記述した。

なお、本研究における文献の記載は、日本社会福祉学会「社会福祉学」に準拠し、巻末に原著者名・文献・出版社・出版年・引用箇所を明示した。

#### 4. 研究結果

##### (1) 対象事業所の状況

対象事業所 14 か所の事業開始は 10 年以上が 8 か所、10 年未満が 4 か所、5 年未満が 2 か所で、経営主体は社会福祉法人（社協以外）と営利法人がそれぞれ 6 か所で、医療法人と NPO 法人がそれぞれ 1 ヶ所であった。また、対象になった事業所は単独型が 3 か所で、併設が 11 か所と併設している事業はグループホームや介護施設、サービス付き高齢者向け住宅、地域包括支援センター、地域密着型介護サービス、保育園などであった。

利用者数は平均 22.71 人で、利用者数のうち認知症の人は平均 16.42 人、利用者数のうち特養待機者数は平均 1.42 人で、特養待機者数のうち認知症の人は平均 1.21 人であった（表 1）。

表 1. 対象事業所の状況

No	事業開始	経営主体*	併設機関**	利用者数			
				うち認知症の人	特養待機者数		
					うち認知症の人		
1	2013	社法	G.H.、保育園	25	21	1	1
2	2006	医療	G.H.	18	14	0	0
3	2014	社法	地域密着型	25	23	1	1
4	2008	営利	単独型	16	14	0	0
5	2009	社法	訪問系介護	29	19	1	1
6	2014	社法	地域密着型	24	15	1	1
7	2009	営利	G.H.、小多機	26	11	1	0
8	2009	社法	G.H.、施設系介護、地包、サ高住	25	21	8	7
9	2014	営利	単独型	21	20	1	0
10	2007	営利	サ高住	24	22	1	1
11	2016	営利	G.H.	23	10	0	0
12	2015	社法	G.H.、地域密着型	26	10	2	2
13	2006	営利	G.H.、訪問系介護	13	11	2	2
14	2008	NPO	単独型	23	19	1	1

\* 社法：社会福祉法人(社協以外)、医療：医療法人、営利：営利法人、NPO：NPO 法人

\*\* G.H.：グループホーム、小多機：小規模多機能型居宅介護、地域密着型：地域密着型介護保険事業所、訪問系介護：訪問系介護保険事業所、施設系介護：施設系介護保険事業所、地包：地域包括支援センター、サ高住：サービス付き高齢者向け住宅

## (2) 単語頻度による要因の解釈

テキストデータから得られた 933 の文には、異なり語数 3,941 の語が含まれており、総抽出語数は 52,079 であった<sup>i</sup>。その後、全体の語の中で出現回数が多かった 150 語が示された (表 2)。

専門職の実践体験から認知症の人を支える家族介護者の心理的支援の有効性に関する要因を出現数が多かった語は「家族」が 380 回でもっとも多く、「小多機」285 回、「人」233 回、「利用」176 回、「介護」167 回、「認知症」146 回、「ケアマネジャー」130 回、「訪問」120 回、「職員」116 回、「サービス」114 回などで、認知症の人や小多機に関する語が非常に多く、介護サービスの利用や介護の過程に関する語も出現頻度が高い結果であった。また、心理的側面に関する語は「良い」や「大丈夫」、「安心」、「理解」などの肯定的な語が多い一方で、「分かる (否定)」や「難しい」、「不安」、「悪い」などの否定的な表現も多い結果であった。

表 2 回答中に頻出した 150 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
家族	380	一番	41	週	24
小多機	285	結構	41	少ない	24
人	233	大変	39	保険	24
利用	176	変わる	38	ショート	23
介護	167	最後	37	奥	23
言う	165	増える	37	情報	23
行く	153	泊り	36	長い	23
認知症	146	分かる	36	働く	23
来る	138	気持ち	35	問題	23
ケアマネジャー	130	困る	35	ケース	22
訪問	120	本当に	35	近所	22
職員	116	知る(否定)	34	息子	22
サービス	114	受ける	33	男性	22
多い	106	紹介	33	泊まる	22
今	97	必要	33	連絡	22
自分	96	母	33	委員	21
家	94	他	32	援助	21
事業所	93	対応	32	外	21
見る	87	一つ	31	元気	21
地域	78	居宅	31	最近	21
包括	76	考える	31	事例	21

<sup>i</sup> 逐語録をすべてテキスト形式で入力し KH Coder に投入すると、自動的に単語に区切られ種々の分析法で抽出することができる。その際、活用と持つ語はすべて基本形で抽出される。

支援	74	持つ	31	回	20
話	74	関係	30	自宅	20
本人	69	大丈夫	30	住んで	20
病院	68	電話	30	進む	20
最初	65	薬	30	先	20
使う	65	デイ	29	負担	20
相談	65	特養	29	風呂	20
施設	63	毎日	29	様子	20
入る	63	話す	29	理解(否定)	20
時間	59	月	28	悪い	19
出る	57	少し	28	過ごす	19
帰る	56	状況	28	関わる	19
違う	55	声	28	迎える	19
一緒	55	全部	28	言う(否定)	19
看取る	55	不安	28	実際	19
在宅	54	ケア	27	法人	19
聞く	54	サ高住	27	民生	19
前	52	感じる	27	一人暮らし	18
年	51	場合	27	気	18
いろいろ	49	入れる	27	市	18
分かる(否定)	48	看る	26	社会	18
状態	47	理解	26	登録	18
良い	47	ステップ	25	普通	18
仕事	44	安心	25	来る(否定)	18
生活	44	行う	25	ある程度	17
難しい	44	作る	25	お家	17
感じ	42	食べる	25	その	17
説明	42	独居	25	医療	17
娘	42	割	24	行ける	17

### (3) 多変量解析によるテキストデータの解釈

#### 1) 対応分析による解釈

コーディングの結果を使って多変量解釈 (MDS) を行い、関連が強い (もしくは強いと推測される) スコアの布置図を作成した。対応分析による成分 1 (3.63%) と成分 2 (3.2%) のスコアをもとに出現頻度がもっとも高い「家族」は「聞く」や「自分」、「帰る」、「出る」という語が互いに近くに位置している。次に出現頻度が高い「小多機」は「サービス」、「在宅」、「ケアマネジャー」、「相談」、「事業所」、「職員」、「難しい」などが互いに近くあることがわかる。次に出現頻度が高い「人」は「状態」、「介護」、「仕事」、「認知症」、「結構」、「看取る」、「生活」などが互いに近くにある (図 1)。

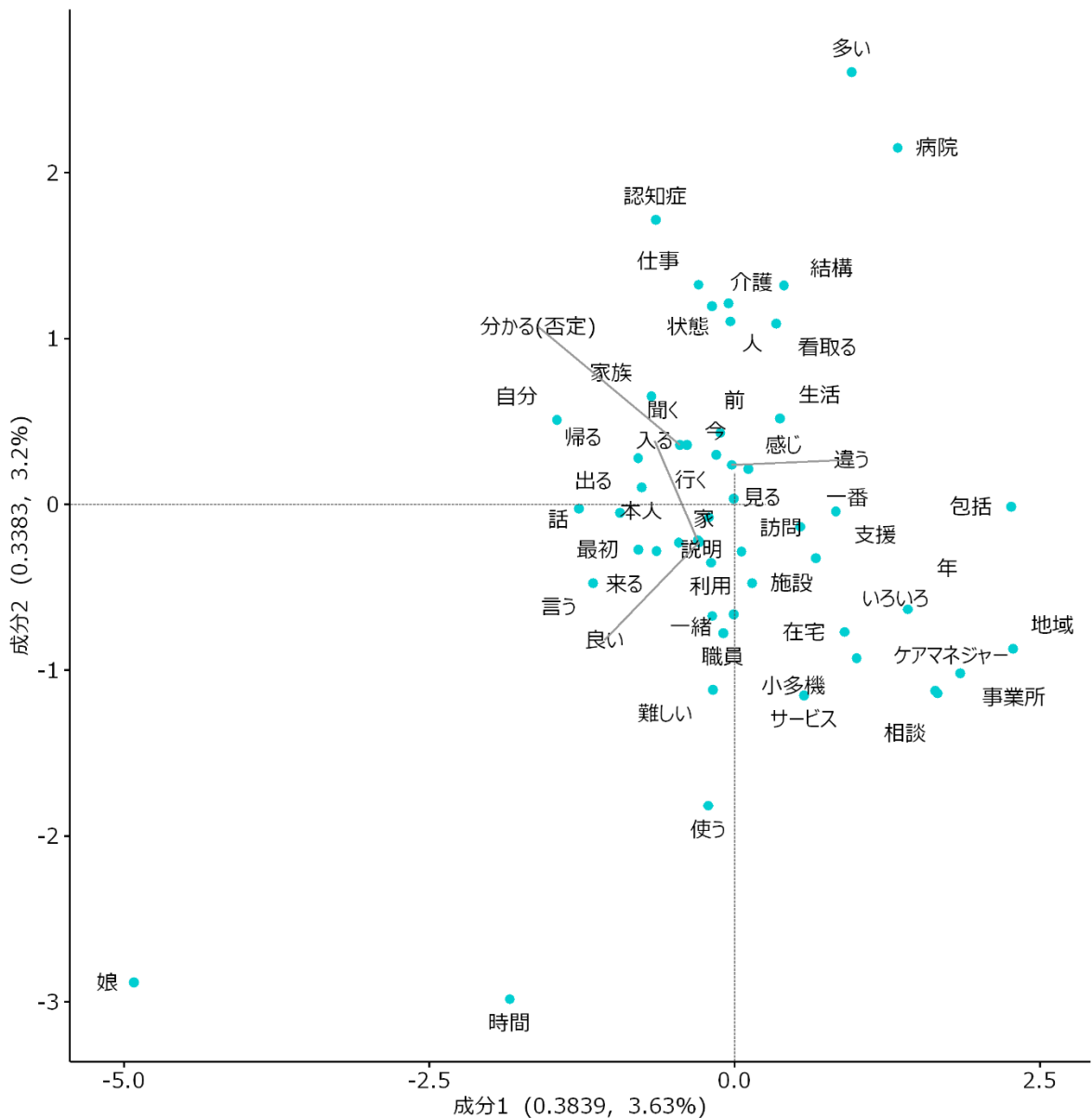


図1 構成要素変数の成分スコア布置図

2) 階層的クラスター分析による解釈

テキストデータの対応分析で得られた成分スコアをもとにもう少し詳しい頻出語の構成を調べるため、階層的クラスター分析を行い、デンドログラムと共起ネットワーク図を作成した(図2、図3)。

階層的クラスター分析によるデンドログラムからは7つのクラスターが分類できた。クラスター1は「良い」、「時間」、「娘」、「今」、「自分」、「一番」、「状態」、「本人」、「仕事」、「支援」の語が近く構成されている。クラスター2は「帰る」、「利用」、「家」、「見る」、「行く」、「家族」、「来る」、「言う」、「一緒」、「最初」、「出る」、「認知症」、「入る」という語と近い構成である。クラスター3は「訪問」、「職員」、「人」、「介護」、「小多機」、「サービス」、「使う」、「違ふ」の語が近く構成されており、クラスター4は、「分かる(否定)」、「前」、

「いろいろ」、「感じ」、「聞く」、「話」、「難しい」、「説明」が近く構成されている。クラスター5は「看取る」、「病院」、「結構」、「多い」の語に構成され、クラスター6は「在宅」、「施設」、「生活」、「年」、「地域」の語が近く構成され、クラスター7は「相談」、「包括」、「事業所」、「ケアマネジャー」が近く構成されている。

さらに、クラスターごとに構成されている要素に含まれている語りの概念について解釈を行った。クラスター1は「小多機は本人が薬の管理ができないならその都度服薬の支援をすれば良い」や「通いサービスの時間が決まっても柔軟にできる」、「時間に余裕を持てる」などの語りから『臨機応変な支援』と名付けた。

クラスター2は「家族に声掛けをしながら支援できるのが小多機の良さだと思う」や「サービスを受ける側の柔軟性」、「本人の意思がある方にはサービス内容を変えていくが認知症が進んでいる方、自己決定できない方には家族という考え方もある」などの概念から『認知症と家族への取り組み』と名付け、クラスター3は「サービスを受けない時に認知症が発症している人にとって早くから小多機を使ってくれればと思う」や「農閑期は在宅サービスを使いながら生活する。小多機もそういう使い方する方もいる」、「小多機の機能を使って閉じこもった人をサービスでどうにか繋ぐことができた」などの語りから『身近な小多機』とした。

クラスター4は「クレームの多い家族がいないわけではない。怒ったりするような家族にはすべて説明する。“ここまでの対応は自分たちがして今後はこうしていきます”など全部話せば納得」や「認知症が発症していると最初に説明しても理解は難しい。症状が変化していく段階で理解してもらおうようにしている」、「まずサービスの説明をして必要があればお家の方に行ったりとかしたりという感じ」などの概念によって『持続的な説明』と名付け、クラスター5は「夜間だけでは家族が見ることもやっていたが腰を痛めて結局長期で利用して看取りまで」や「本当に安心だと思う。契約時の時点で看取りまで世話することができることを伝えている」、「家族がいる方は家庭でも事業所でも看取ることができる」などの語りから『最期への支援』と名付けた。

クラスター6は「基本的には在宅サービスなので極力家を拠点として本人として住み慣れた地域でできるだけ」や「在宅での生活が出来なくなって、割と軽い状態なのに入所しなければならない状況が私たちから見るとそこがまだまだ在宅で行けるのではという想いはある。そうした方たちはケアマネジャーも小多機があるからどこかの小多機を紹介する」、「通いも泊りも一日の生活の流れが利用者に合わせている」などの概念で『安心した地域生活』として、クラスター7は「時間に制約が全くないわけではないが送迎の時間を気にして相談がおろそかにならないよう配慮している」や「交流がない地域の方が突然相談に来ることもある。相談しやすいところへいけばいい」、「家族も24時間365日の安心を謳っているので困ったときに相談できるその安心感」の語りから『相談しやすさ』として名付けることができた。

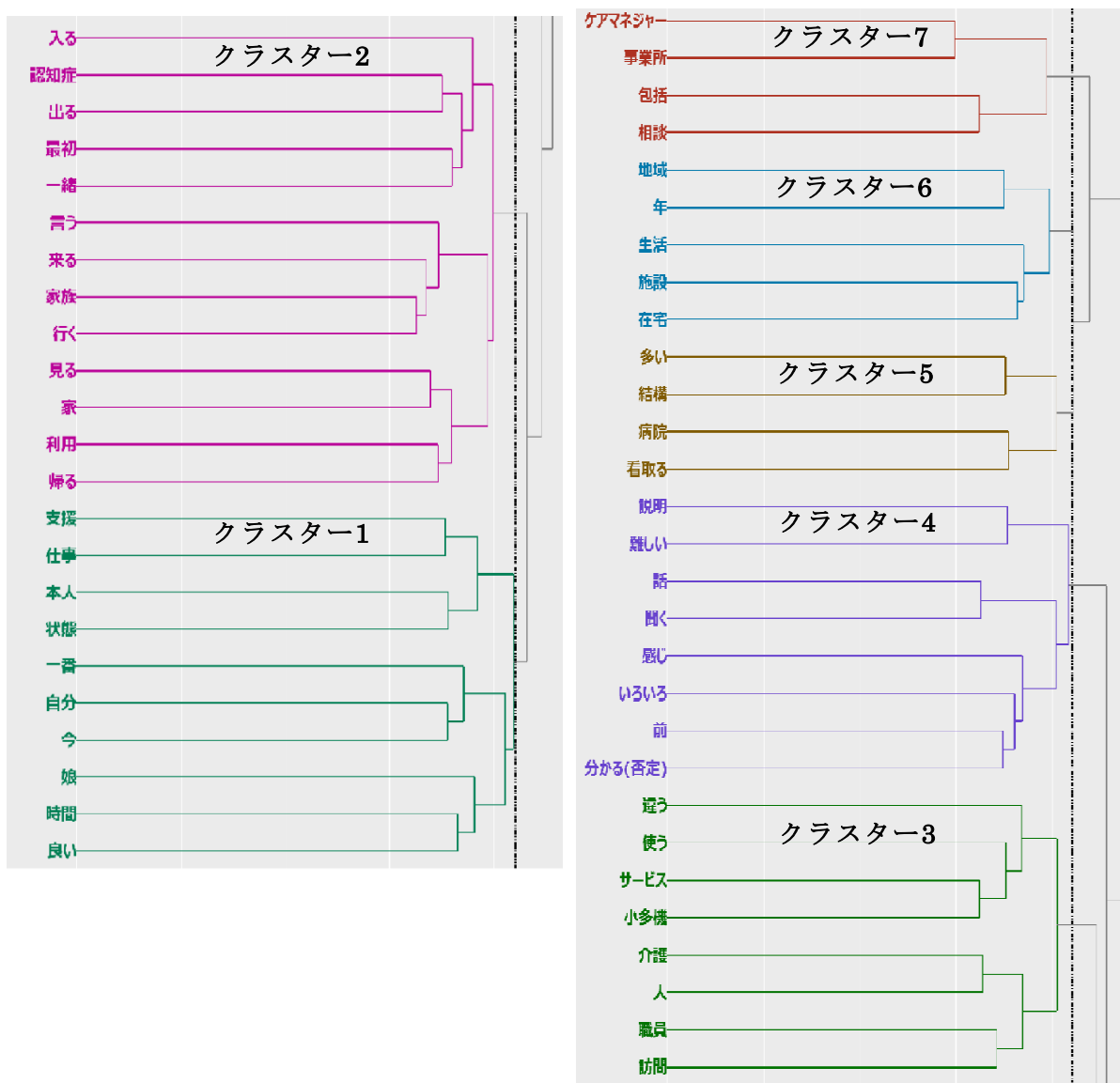


図2 階層的クラスター分析による構成要素

### 3) 共起ネットワーク図による解釈

テキストデータ内で出現頻度の高い語のうち出現パターンの類似した語（共起の程度が強い語）をいくつかのコミュニティ（共通の属性をもつグループ）に分割し、語り全体による共起ネットワーク図をモジュラリティによって示した（福井ら 2013 : 3-9）。

共起ネットワーク図を見ると、分析に用いたテキストデータが語りからなることからコミュニティ内においてノード（表示される語句）同士の多数のリンク（共起を示す線）が複雑に絡み合っている。また、出現頻度の高い「家族」は「人」や「利用」、「介護」、「訪問」、「職員」などの単語とつながっており、「小多機」の語は「ケアマネジャー」や「事業所」、「サービス」と強いネットワークを形成している。「認知症」は「出る」や「家」、「帰る」、「利用」などにつながっていた。さらに、「相談」という語は「包括」と「病院」の語とつながっていて、その語が含まれている語りから、認知症になったら初期



の相談先が包括と病院である事で「相談」と「包括」と「病院」という単語間に共起関係が見られていた。

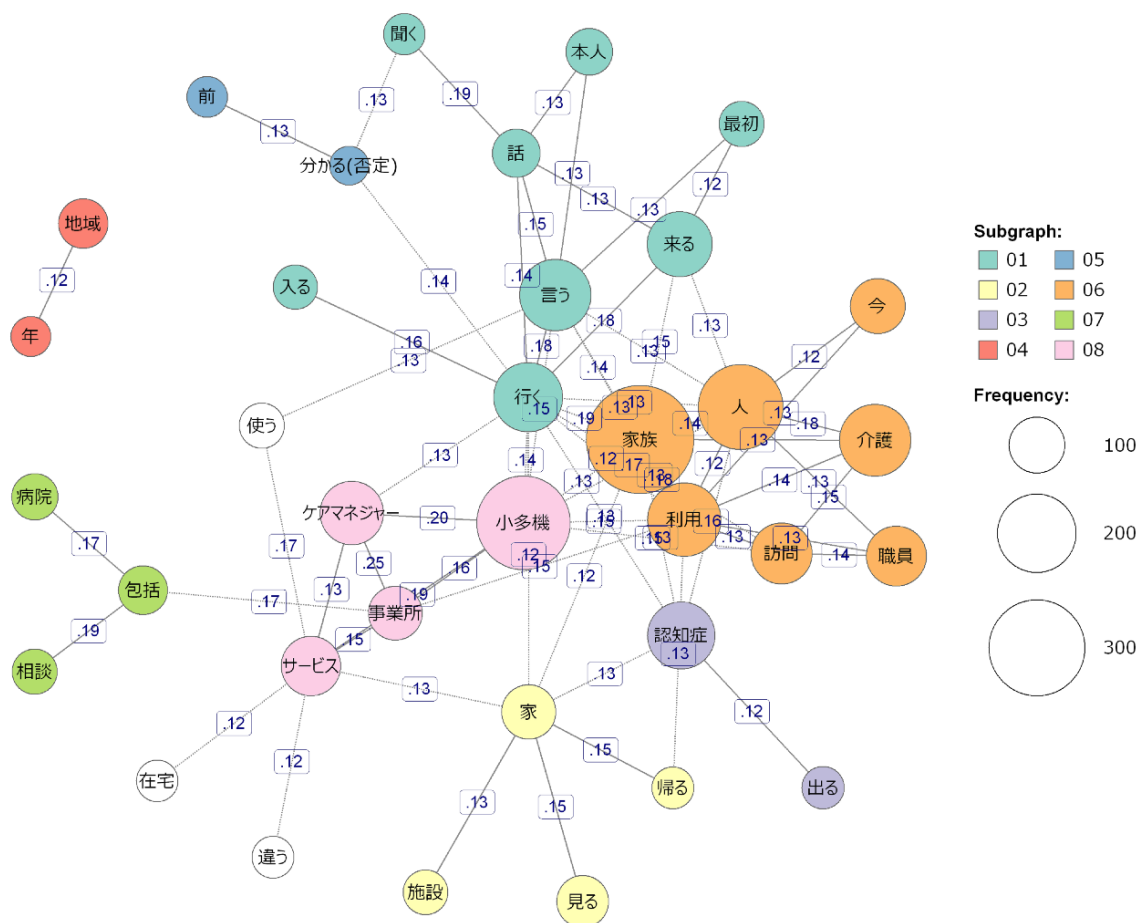


図3 共起ネットワーク

5. 考察

本研究は、小多機の専門職を対象に実践体験を語ってもらい、小多機における認知症の人を支える家族介護者の心理的支援の有効性に関する要因について KHCoder を用いてテキストマイニング手法で分析を行った。その分析の結果から『臨機応変な支援』、『認知症と家族への取り組み』、『身近な小多機』、『持続的な説明』、『最期への支援』、『安心した地域生活』、『相談しやすさ』の7つの要因が示された。

小多機は他の在宅サービスと比べて緊急時に利用可能で臨機応変な対応ができることと、いつでも支援を求めることが可能な接近性と利用者のニーズによってサービスを組み合わせることができること、認知症の人本人と家族が必要な時に専門職から相談できる体制になっていること、看取りまで関わっている小多機も多く最期まで安心して住み慣れた地域で生活することができるなどが小多機における有効性であることが明らかになった。

周知のとおり家族成員の一人が認知症と呼ばれる状態になるのは、その症状が記憶障害

を主としていることから、自己や自分の家族にとって高齢期における最大のリスクといえる。認知症の発症は、家族成員の全員に大きな支障をもたらす要素も潜んでいることの意味でもある。家族成員の中で今まで維持してきた見えないバランスが崩れ、今までの問題解決方法では解決できないことで、ストレスが加わり、身体的・情緒的な負担によって深い不安と危機感を抱くようになる（任 2016：273）。このような状況で近年、医療・福祉サービスの多様化によって認知症の人が利用できるサービスも多くなっており、これらのサービスの上手な活用は認知症の人への支援のみならず家族介護者の心理的側面にも余裕をもたらし、介護負担の軽減や介護問題も予防までつながると思われる。

全国小多機連絡会の報告によれば、小多機は地域の中でハブ機能となって医療および福祉・介護を始めとする各機関の協働を包括的にサービス展開することも可能にしているとし「複数の課題を抱えている本人・家族やサービス利用がスムーズに行われていない場合など小多機のもっている専門性や人材を地域展開することは望まれるところでもある（全国小多機連絡会 2017：139-140）」としている。

認知症の人を支える家族介護者の心理的支援についても小多機は有効であることが本研究から明らかになった。しかし、小多機における支援は未だに認知度が低く、情報提供や地域や地域住民に向けた周知への働きも十分とはいえず、地域住民への周知がより求められていることも示唆された。

本研究は、KHCoder を用いるテキストマイニング手法を使うことでテキストデータを数量化し分析することができた。しかし、テキストマイニングの弱点でもある、言葉が持っている意味や文脈に含まれている様々な意味などについての曖昧さを持っていることから今後、テキストデータが持つ真の意味を探ることが課題として残された。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 18H05722 の助成を受けたものである。

#### 【参考・引用文献】

- 1) 任 賢宰(2016)「認知症高齢者を支える家族介護者支援のシステムのあり方に関する研究—サービス利用と心理的変容の考察を通じて—」『立教大学コミュニティ福祉学研究科』、273-275.
- 2) 本間 昭ほか(2013)『介護福祉士養成テキストブック・11「認知症の理解[第2版]』』ミネルヴァ書房、348-349.
- 3) 福井美弥、阿部浩和(2013)「異なる文体における共起ネットワーク図の図的解釈」、『図学研究』、47巻4号、3-9.
- 4) 特定非営利活動法人全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会(2017)「平成28年度老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業」『小規模多機能型居宅介護の機能強化に向けた 今後のあり方に関する調査研究事業報告書』、139-140.